

高等学校事情

第6回 東北エリア

今号では東北エリアの秋田県と宮城県の動きをレポートする。少子化が進む秋田県では、定員割れする高校が増加し、公立高校の統合・再編整備が不可避である一方で、高い高校進学率の維持も課題になっている。宮城県は、全県一区制への移行で進学エリアに変化が見られた。さらに、2013年度に行われる入試制度改正による志願倍率等の変動も予想される。

秋田県

秋田県のアウトライン

大学等進学率は上昇傾向 約8割は県外へ流出

文部科学省「2011年度学校基本調査速報」によると、秋田県の18歳人口は1万860人で全国第37位、東北6県の中で最下位となっており、少子化が進んでいる地域である。高校数は公立53校、私立5校の合計58校(特別支援学校を除く)、生徒数は公立約2万5600人、私立約2800人(定時制を除く)の合計2万8400人で、高校

数、生徒数ともに9割近くを公立高校が占めている。

大学等進学率は徐々に増加傾向にあるが、県内の大学が国公立・私立を合わせて11校と少なく、県内進学率は約20%にとどまる(図表1)。県外では、宮城県をはじめとする東北や首都圏への進学が多いが、経済的な事情から、首都圏の私立大学への進学よりも、地元の国公立大学への現役での進学、あるいは就職といった進路を望む保護者が多いようだ。

高校の現状① 改革の取り組み

進む少子化の影響で 後期選抜を廃止

秋田県教育委員会は、2010年度で終了した「第五次秋田県高等学校総合整備計画」の実施状況をふまえ、「生徒の社会的自立」と「時代の変化に柔軟に対応した学校づくり」を柱とす

る、2012～2016年度の「第六次秋田県高等学校総合整備計画」を策定した。新計画の特徴は、具体的な数値目標を設定した点にある(図表2)。県教委は「今までにはないやり方だが、高校教育の方向性を県民により明確に示したかった」としている。

第五次計画から引き続き進めている施策として再編整備事業がある。秋田県の少子化は東北6県の中でもかなり進んでいる。2011年3月の中学校卒業生数は1万30人だが、2020年には約7900人に、2025年には約7000人にまで減少すると予測されている(県教委による推計)。

2011年4月には、北秋田地区の4校を統合した秋田北鷹高校と、湯沢地区の2校を統合した湯沢翔北高校が開校。2016年度までに大館地区、能代地区、角館地区の再編整備が予定されており、計9校が再編の対象となっている。その一方で、秋田県の高校進学率は98.9%(2011年度)と全国平均の98.2%を超えており、教育を受ける機会を保障するといった観点から、それ以外の一部は小規模校として存続させることも視野に入れた検討がなされている。

これら以外の注目される動きとしては、2013年度から実施される公立高校の入試制度改正が挙げられる。現在は、前期選抜、一般選抜、後期選抜

の最大3回の受験機会が設けられているが、改正後は後期選抜を廃止し、面接等に学力検査または口頭試問を加えた「前期選抜」と、定員枠を拡大した「一般選抜」の2回の選抜となる。

改正について県教委は「少子化の影響で、定員割れや志願倍率が低下する高校が増加している。後期選抜の廃止により、一般選抜の募集人員は定員の70～95%へと拡大される。志願者が最も多い一般選抜の枠を広げることに、生徒の希望を最大限に生かすことのできる入試制度をめざす」と説明する。

高校の現状② 学力向上施策

到達目標の明確化で 学力向上を後押し

県教委は、学力向上施策として、2008年度から実施している「高校生パワーアップ事業」をさらに充実させ、2010年度から「高校生未来創造支援事業」に取り組んでいる。県内の小・中学生の全国学力テストにおける好成績をふまえ、高校でのさらなる学力向上を図る事業である。

この事業の中で、新たに取り組んでいるのが「地域医療を支えるドクター育成事業」である。県政の課題である医師不足に対応する施策で、秋田大学医学部や県内3つの総合病院、個人開業医などの協力を得ながら、地域医療に携わる人材を育成する。

医療現場における「病院体験研修」や、医師・医学部生による講義、ディスカッション等を行う「メディカルインターンシップ」、勉強合宿を行う「ハイレベル講座」など、医学部進学に特化した指導が1、2年生を対象に実施されている。参加者は、県立高校

図表2 第六次秋田県高等学校総合整備計画の成果目標

指標	現状	目標
中途退学率	1.3%(2008年度) 1.3%(2009年度)	1.0%
1,000人当たりの不登校生徒数	13.6人(2009年度)	10人
就職決定率	97.4%(2010年度卒)	100%
就職決定者に占める県内就職率	56.8%(2010年度卒)	70%
県内就職者の1年以内離職率	13.3%(2009年3月)	10%
長期インターンシップ(11日以上)参加者数	29人(2009年度)	60人
センター試験の得点の県平均が全国平均を上回る科目の数	7科目(2010年度卒)	15科目(全科目)
東大現役合格者数	12人(2010年度卒)	15人
東北大現役合格者数	112人(2010年度卒)	130人
医学部現役合格者数	26人(2010年度卒)	40人

から公募している。

もう一つ新たに取り組んでいるのが、志望進路別に学力向上をバックアップする「習熟度別学習推進事業」である。「進学コース別ハイレベル講座」では、志望する進学先に応じた実践的な講義・演習を通して、思考力や読解力の強化によって、主に数学や英語の学力向上を図る。

コースは、東京大学・京都大学の合格を目標にした「スーパーハイレベルコース」、東北大学や北海道大学等を目標にした「ハイレベルコース」、「医学部医学科コース」の3つがある。各コースともに1、2年生を対象に学年別で年4回実施される。

そのほか、「プロフェッショナル活用事業」では、外部の技術者や大学教員、研究者などの「プロフェッショナル人材」を活用し、学力向上、教員の指導力向上に取り組む。夏季・冬季休暇を利用した高校生対象の2泊3日の合宿セミナーには、理数系博士号を持つ教員も参加し、実験観察研修などが実施されている。この事業では、秋田県出身の有識者を学術顧問に迎え、講演やシンポジウム等を通して、意欲の

向上も図っている。

進路指導の特徴

高校主体の丁寧な指導で 国公立大進学者が増加

秋田県内には大手予備校が少ないため、高校での進路指導が非常に重要だ。模擬試験や個人面談、長期休暇中の補習・補講など、手厚い指導が行われている。

県内トップの進学校である秋田高校では、担任の他に校長や教頭が全生徒と一対一の面接を複数回実施し、やる気を引き出している。その結果、2009年度入試では、東京大学の現役合格者が東北の高校で最多の10人に上った。

2008年度からSSH指定校となっている大館鳳鳴高校は、2年次に理数科を1クラス設け、少数精鋭の教育をしている。他校との合同研修会や韓国での海外研究発表会などで学習意欲を高めており、国公立大学への進学者数は年々増加している。

図表1 18歳人口と進学率の推移

年度	2007	2008	2009	2010	2011
18歳人口(人)	12,139	11,702	11,054	10,987	10,860
大学等進学率(%)	41.7	43.1	43.9	45.9	44.5
地元大学進学率(%)	20.6	19.7	21.5	22.4	21.4
地元短大進学率(%)	52.3	56.8	55.6	59.4	58.7

※学校基本調査報告書を基に進研アドが算出。
※大学等進学率には、大学・短大の通信教育部への進学者を含む。過年度卒業生を含まない。
※地元大学進学率、地元短大進学率には過年度卒業生を含む。

宮城県

宮城県の アウトライン

15の私立大学・短大も 高い地元進学率を支える

文部科学省「2011年度学校基本調査速報」によると、宮城県における18歳人口は2万3038人で、東北では第1位。高校数は公立83校、私立19校の合計102校(特別支援学校を除く)、生徒数は公立約4万7300人、私立約1万6150人(定時制を除く)で、合計約6万3450人である。

大学等進学率は47.6%で全国31位(2010年度)。全国平均より6.6ポイント低い。県内への進学志向が強く、近年の地元大学進学率は60%前後で(図表1)、2011年度は全国第5位である。国立の東北大学や公立の宮城大学のほかに、東北学院大学、東北福祉大学など、15校ある私立大学・短大が地元進学率を支えている。進学先のエリアは大きく2つに分かれ、この数年は県内を含む東北が70%、首都圏が30%という割合で定着している。

図表1 18歳人口と進学率の推移

年度	2007	2008	2009	2010	2011
18歳人口(人)	25,552	24,418	23,607	23,481	23,038
大学等進学率(%)	42.5	44.8	46.0	47.6	-
地元大学進学率(%)	57.5	59.5	59.0	59.8	59.8
地元短大進学率(%)	51.1	56.4	59.0	54.6	59.6

※学校基本調査報告書を基に進研アドが算出。 ※2011年度の大学等進学率は、東日本大震災の影響により確定値が未公表(2011年12月現在)。
 ※大学等進学率には、大学・短大の通信教育部への進学者を含む。過年度卒業生を含まない。
 ※地元大学進学率、地元短大進学率には過年度卒業生を含む。

高校の現状① 改革の取り組み

全県一区制への移行で 仙台市内の進学に変化

宮城県教育委員会は2001年度から2010年度の間、「県立高校将来構想」を基に、「魅力ある高校づくり」「男女共学化の推進」などを軸とした高校の教育改革や再編整備に取り組んできた。この結果、総合学科等の特色ある学科や中高一貫教育校が設置された他、いわゆるナンバースクールに代表される男女別学校が2010年度までに全て共学化された(図表2)。

2009年度には学区制が廃止となった。それまでの5学区制を全県一区制へと移行。これにより、特に北学区・南学区の2学区に分かれていた仙台市内の高校進学動向に変化が表れた。

旧北学区では、変更以前は、難関大学への進学者が多い仙台第二高校の人氣が最も高かったが、近年は、同じく県内有数の進学校である仙台第一高校など、旧南学区の高校への志願者が増加しているという。

県教委は、「旧北学区内の生徒の人数は旧南学区の約1.5倍。選択肢が増えた結果、多くが仙台第一を含む旧南学区の高校を志望するようになるなど、志望動向が大きく変わった」としている。

加えて、仙台市内の公立高校は、私立高校との共存のために、定員が縮小

され、周辺部の高校への流出も見られるという。全県一区への移行は、仙台市内の高校に少なからず影響を与えたようだ。

2011年度からは、2020年度までの10年間を見通した「新県立高校将来構想」に着手。このうち、前半の5年(2011~2015年度)を「第1次実施計画」として県立高校改革に取り組んでいる。

この計画による学力向上施策の一つに「進学拠点校学力向上事業」がある。石巻高校、古川高校、白石高校など10校を拠点校に指定。2年生を中心に合同で難関大学志望者向け学習合宿や、大学等から講師を招く公開授業などを実施し、モチベーションアップを図る。

拠点校には、大学進学実績の高いナンバースクールをはじめ、仙台市内の高校は含まれていない。県教委は、「仙台市内に生徒が集中しないよう、市外の地方部にも国公立大学への進学をめざせる拠点校が必要だ」としている。

他にも、2005年度から継続している「高等学校学力向上推進事業」がある。これは、学力テストやアンケートによって生徒の実態を把握し、学力向上に役立てるのが目的で、県内の全公立高校で実施している。1、2年生対象の学習状況調査と、2年生対象の3教科(国数英)の学力調査を行い、その結果を各高校にフィードバックする。結果は、進学・進路指導対策や次年度の授業計画の組み立てなどに活用される。

再編整備における特徴的な動きとしては、登米地区における統合計画が挙げられる。県北部、岩手県との県境に位置する登米地区は、2010年から2020年までに中学校卒業生数が約130人減少する見込みで(県教委によ

る推計)、現在の全日制高校5校を3校に再編し、2015年度には総合産業高校を新設する。登米地区の産業を担う人材や、高齢化に対応した福祉・介護サービス分野の人材の育成を目的に、福祉系を含む複数の職業系専門学科を統合した新しいタイプの高校となる予定だ。

高校の現状② 入試制度改革

推薦入試を廃止し 努力重視の制度へ

2013年度から新たな入試制度が導入される予定だ。現在は、推薦入試と一般入試の2度の受験が可能で、普通科は定員の30%、職業系専門学科は40%を推薦入試で選抜できる。そのため、1月末に合格が確定する生徒が多く、早期合格をめざした「推薦入試のための学習」が定着していた。さらに、同じ評定値でも中学校により合否が分かれる中学校間格差も指摘されるなど、推薦入試の制度疲労が見られるようになったため、改革にふみ切った。

新制度では、調査書と作文、面接、実技で合否を判定していた推薦入試を、国数英3教科の学力検査と各高校の独自検査(面接・実技・作文から1つ以上)を実施する「前期選抜」に変更。募集枠も普通科は定員の10~20%、専門学科は10~30%に縮小される。

一般入試は、現行の5教科の学力検査に面接や実技などの学校独自の検査を加えた「後期選抜」に変更される。加えて、前期選抜では成績や各種資格、課外活動の状況などの「出願できる条件」を、後期選抜では「調査書と学力検査の比重」を各高校で設定で

図表2 県立高校の男女共学化の主な状況

(旧)高校名	共学化した年度	内容
石巻高校	2006年度	単独共学化
仙台第二高校	2007年度	単独共学化
第一女子高校	2008年度	単独共学化、単位制へ移行。「宮城第一高校」に改名
仙台第三高校	2009年度	単独共学化、校舎改築
仙台第一高校	2010年度	単独共学化、通信制の分離独立
第二女子高校		併設型中高一貫教育校へ移行、校舎改築。「仙台二華高校」に改名
第三女子高校		単独共学化、校舎改築。「仙台三桜高校」に改名
塩釜女子高校		共学の塩釜高校に統合
白石女子高校		共学の白石高校に統合(普通科と看護科を併設)普通科を単位制へ移行

き、事前に受験生へ告知される。

学校独自の基準や科目を新たに取入れる今回の改正によって、高校の特色化が進み、生徒がより自分に合った高校を選択できると期待されている。また、前・後期いずれも3教科以上の受験が必要となるため、県教委は、「最後まで努力を怠らなかった生徒が合格するしくみになる」としている。

しかし一方で、各高校が決める出願基準や調査書と学力検査の比重次第で、難易度や志願倍率が変動すると考えられ、高校の“勢力分布”がどう変化するか予測しきれない部分も残る。

進路指導の特徴

手厚い指導により 進学率が向上した高校も

進路指導は、各高校ともこれまで生徒の自主性に任せる傾向にあった。しかし、“選ばれる高校”をめざしてきたことにより、近年は徐々に丁寧な指導に変化している。

中でも1923年設置という伝統があり、県の進学拠点校にも指定されている石巻高校は、きめ細かな進路指導が

特徴だ。朝のホームルーム前の10分間を使って全校生徒が取り組む「朝自習」や、1、2年生の希望者を対象に行われる「土曜学習会」で学習時間を確保。さらに、課外講習や学習合宿などで、長期休暇中も手厚く指導している。

2003年度からは、大学入試センター試験の会場となる石巻専修大学での「センターリハーサルテスト」を実施。初回の2003年度の大学・短大進学率は55.8%で、そのうち国公立大学への進学者数は18人であったが、2011年度には大学・短大進学率76.4%、国公立大学進学者数は69人に増加した。

私立高校で特徴のある進路指導を行っているのが、進学コースを設置している中高一貫教育校の古川学園高校である。「現役合格100%」をめざす進学コースでは、1、2年次は学期ごとにクラス分けを実施、3年次は志望校別にクラスを編成するなど、一人ひとりに合ったペースで学力アップを図っている。放課後には進学コースを対象に特別授業「進路研究会」を設け、学習時間を確保している。2011年度入試では、東京大学2人、東北大学11人を含む47人が国公立大学に合格した。